「*iの折れ」考——蒙古語における
*i音の発展の規則性と不規則性——

栗 林 均

1.

蒙古文語（Written Mongolian）の正書法は、一般に蒙古語のより古い発展段階を反映していると考えられている(1)。これについてN. ポッペは次のよう
に述べた。

「古代蒙古語（Ancient Mongolian）は共通蒙古語（Common Mongolian）
とほとんど合致していた。蒙古文語は音声的・形能的発展の観点から古代蒙古語をよく反映している」(2)

このように、蒙古文語が古代蒙古語を、さらには共通蒙古語をよく反映している
という事とは、多くの経験的事実の支持するところでもある。このことから、
蒙古文語をもって共通蒙古語と仮定して、蒙古語の史的・比較研究をすすめていく
方法が考えられる。じっさい、蒙古言語学の分野で先駆けたことは、こうした
見通しにたって、蒙古方言の記述的研究と並行して、方言形と蒙古文語形を対
照してその歴史的発展の説明をところみてきた。そうした研究は、方向性におい
て是認されるばかりでなく、その研究の蓄積は現在でも重要な意義をもつもの
である。

しかし、蒙古文語を共通蒙古語とみなすのは、あくまでも作業仮設であって、
検証ずみの定説として両者を同一視することは避けなければならない。仮設は
検証されねばならず、また反証される可能性をも含んでいる。蒙古語の史的・
比較研究によって、蒙古文語が汲む尽きせぬ資料の宝庫であることは疑いないが、
その資料としての価値と限界について、常に反省を怠ってはならないであろう。

蒙古文語のなかには、新しい時代に口語からの類推によって作られた正書法
が混入している可能性がある。かつて服部四郎氏が蒙古文語のedür（日）と
ebül（冬）の第1音節の母音について論証されたように(3)、蒙古文語では他の
一連の語と同じ様式の正書法をもっていたながら、蒙古諸方言の形を比較してみ
ると、対応の公式に合致しない場合がありうる。こうした、いわば「きかい」

——32——
の正書法が蒙古文語のどこかに営んでいるか、前以て判別することができない以上、蒙古文語形の資料としての価値は文献学的研究や諸方言の比較研究の裏付けを買って、はじめて確実なものとなる。

蒙古文語が、いわゆる「文字言語（Written language）」であることにによる条件も考慮しないわけにはいかない。いかなる書記体系も、それをあらわす音声言語の資料として利用するためには解釈をほどこさなければならないのであって、蒙古文語もこの例に漏れない。たとえば、蒙古文語の正書法では語頭音節の円唇母音をあらわすのに男性母音d，和と女性母音d，の二種類を書き分けれるだけであるが、これは純粋に表記上の制限によるもので、蒙古文語の基礎にあった言語の特徴をそのまま反映しているとは考えられない。このように蒙古文語が書記体系として解釈を必要とする点は少なくない。

上に述べた二つの問題が解決されたとしても——つまり文献学的な批判と書記体系としての解釈を経たあくても、蒙古文語の比較方法論上の位置づけに関する問題が残る。蒙古文語が他のいずれの方言にも増して多くの古い特徴を保存しているにしても、いずれかの（あるいはすべての）蒙古方言が蒙古文語の基礎にあった言語に直接さかのぼることが明らかでない以上は、比較方法論上、蒙古文語も他の諸方言と同列に置かれるべきである。こうしてはじめて、蒙古諸方言のうちにも蒙古文語すでに失われている、より古い特徴が見い出せる可能性が出てくる。一例をあげると、モンゴール方言（Monguor）ではfやxにはじまり蒙古文語では、これに対応する子音が表記されていない一連の単語が見え出される。この点に関して蒙古文語の正書法が表記上の制限によるものか否か即断はできないが、その基礎にあった言語の特徴を反映している可能性もある。後者の場合、上記の語頭子音の保存に関して、モンゴール方言の方が蒙古文語の基礎にあった言語より古い特徴を保存していることになる。上は有名な例であるが、これに類似の事実が将来の研究によって明らかにされる可能性も皆無とはいえない。

この小論では、蒙古文語の第1音節のiに対応する蒙古諸方言の母音をとりあげて、それらの関係を論じるが、とりあげず、蒙古文語におけるiが共通蒙古語の状態を保存していると仮定して、これを蒙古文語におけるi音の史的発展の問題と呼ぶことにする。
蒙古語の歴史のなかで、「*i の折れ」は近代蒙古語のメルクマールのひとつである。
N. ボッヘは蒙古語の史的発展を概観する際に、16世紀にはじまるとする近代蒙古語（Modern Mongolian）の特色を大きく三つにまとめた。
そのうちのひとつは次の特徴である。
「母音の *i が一定の位置で別の母音になった。」
これがすなわち、「*i の折れ」と呼ばれている。
ここで、ボッヘが星印を付してあらわした *i の意味するところを明らかにしておく必要がある。比較言語学で星印を付した形は、再建された形あるいは文献によって実証されない推定された形をあらわす。しかし比較方法論上、これに値するような 2 種の場合は区別しておくことは重要である。ひとつは、利用しうるすべての方言資料を比較して、その対応の公式からしてされた厳密な意味での再建形であり、もうひとつは限られた資料から arbitrary にたてられた、仮説としては推定形である。ボッヘの「*i」の用い方をみると、氏は蒙古諸方言を比較して、*i のもとに諸方言の母音対応の規則を提示してはいるが、また、そうした規則にあてはまらない多くの場合（例外）をも、説明がつかないままに *i のもとに含めている。したがって氏のあらわす *i は厳密な意味での再建形に限って用いられているのではなく、仮設としての *i だということができる。その完全な検証は将来の研究に委ねられているのである。
諸方言の母音対応の公式が未完成のうちに前以って *i を仮定する依りどころは何であろうか。1. の冒頭に引用した文章から、ボッヘは蒙古文語の *i が共通蒙古語の状態を保存していると考えているものと思われる。つまりボッヘの用いる *i は、1. でわれわれが仮設としてもうけた *i と同じ領域をカバーするものとみて間違いいないであろう。
さて、蒙古文語の *i に対応する、諸方言の母音のあらわれは、一見、きわめて複雑な様相を呈している。*i が「折れ」で別の母音としてあらわれる多数の語がある一方、また *i として保存されている語も多数にのぼる。ある方言では *i が「折れ」で、他の方言では *i として保存されているという、多くの「方言間の不一致」があるが、これに関しては不十分な説明しかなされていない。最大の問題は、諸方言においてどういう条件のもとで *i が「折れ」、また *i として保存されるか、ということであるが、「すべての場合をカバーする確定的な
規則をたてることは不可能である」という。「*1の折れ」の説明にはつねに例外がまつながついて離れない。また「*1の折れ」のうちにも、*1音が先行の音を口蓋化子音に変えたり、つまり造化して*1の跡を残している場合と、後続音節の母音に完全に同化して、*1の跡の全くみられない場合がある。このように蒙古語の1音はきわめて変化に富んだ発展をとげた音である。
蒙古語の1音の史的発展について、最後に述べた論考はN.ポッペの『蒙古語比較研究序説』のうちにある記述であろう。同書の「第1音節の短母音」を扱ったセクションでは、26頁余の全体のうち「*1」と「1」の項目だけに12頁が述べられている。他の6節の母音に割かれている説明が平均2〜3頁であることをからしても*1音の変化の複雑さをうかがわせている。そこで、第1音節の*1音の史的発展に関して、ポッペが上記の著作の中で提示した図式の概要をたどってみよう。
ポッペはまず、*1の「折れ」を定義する。「折れ」は単にある母音が別の母音になったというだけでなく、それが「第1音節の母音」についてのもの、さらに「後続音節の母音に対する同化」によって変化した場合のみ適用される。
第1音節の1音の史的発展は次の二つに大別される。
(A)*1が規則的に1として残る場合、
(B)「折れ」が起こる場合。
上の分類に関して、多数の不一致（numerous inconsisties）があるという。それ故方言間の不一致をきざむものと思われる。
次に(A)と(B)の発展を決定する条件が述べられる。まず(A)の「*1が常に保存される条件」に二つある。
(a) 単音節の語幹、
(b) 第2音節に*1か*eを含む2音節以上の語幹
上の条件は、プリミート語を除いて、すべての蒙古語においてあらゆる場合で*1が1となる通則である。プリミート語では、(a)の場合のみ通則に従がい、(b)の場合にはe（語頭ではje）になる。通則に対する例外には二つの場合がある。
(c) モンゴル語では語頭の*の影響により、*1がuとなる。
(d) 少数の語で*1がeとなる。
最後の場合は、後続音節の母音への同化によらない変化をさすものと思われる。
ポッペの挙げている例は二つあって、ひとつは蒙古文語のki- "to do, make,
put”に対応してブリヤート方言（xə-）などでeがあらわれる例。これはge−“to speak”とのあり得るコンタミネーションと、推定している。もうひとつは、蒙古文語のnigen“one”に対応してハルハ方言（negə）等多くの方言でeがあらわれる例である。ボッベは、蒙古文語のnejile−“to unite”，nejite“together”等の語幹の影響の結果かもしれないし、と説明している。

以上述べてきた（A）の条件にあてはまらない場合には、すべて*iが「折れ」ることになる。*iが「折れ」の場合を網羅したのが（B）で、そこでは、「*iの折れ」が後続の音節の母音に対する同化という観点から、第2音節の母音の種類によって、次の10通りの条件があげられている。（1）*aおよび二次的なaの前、（2）*uの前、（3）*üの前、（4）*ar uの前、（5）*egüの前、（6）*ur uあるいは*iur uの前、（7）*ügüあるいは*igüの前、（8）*ura（＞ʊ）および*uα（＞ə）の前、（9）*üge（＞長母音）の前、（10）二次的なoやiの前。それぞれの場合に、*iは異なった発展を示すことになる。

3.

蒙古語の第1音節の*iの史的発展を説明したボッベの図式は、多くの方言資料を駆使した詳細な記述であるが、未だ完全なものではない。ボッベのみずから説明の随所で述べているように、それにはあまりにも多くの不一致や例外が伴っている。われわれは、例外を例外のまま放置しておくわけにはいかない。例外には、なんらかの説明が与えられなければならないのである。図式における例外を直視して、例外のうちなんらかの規則性がないか、また多くの例外をうち出す図式自体に問題はなか、再検討の余地があるように思わえる。

図式の検証に際しては、もっぱらハルハ方言（Khalkha）をとりあげるが、これは次の理由による。ハルハ方言は調査のゆき届いた方言のひとつであり、とりわけこの方言と蒙古文語との比較音声学的分野にはすぐれた研究の伝統がある。「*iの折れ」についても詳細で豊富な資料を利用することができる。これと関連して、「*iの折れ」に関するハルハ方言の伝統的な図式は、多くの例外を伴った不完全な図式でありながら、他の蒙古方言や蒙古語史全体のモデルの役をとってきた。図式の不完全さが、この方言における*i音の複雑な変化の特殊性によるものであればなおさら、ハルハ方言の図式にさかのぼって検
証することが要請される。

① 「完全な折れ」と「不完全な折れ」

ハルハ方言の「*iの折れ」に関する図式の原型はG. J. ラムスデッドによって提示された次のようなものであった。ようって

- a の前の i ＞ *i あ、a；語頭で jå、ja。
- e ＞ *i え、e；*je ＞ i。
- u ＞ i ＞ iu，y。
- ü ＞ i ＞ iü，w；語頭で jü。
- o ＞ i ＞ o。
- ö ＞ i ＞ ö。

さきに見たボッペの図式も、これをそっくり受け継いで部分的に補充・修正したものであることは明らかであろう。

ハルハ方言の「*iの折れ」に最も特徴的な現象は、たとえば「*aの前」という同じ条件のもとに生じた「*iの折れ」でありながら、その結果として a，*i というように、必ずしも等しくない母音があらわれるということである。

よくあげられる例としては蒙古文語の mingran ≪ 千 ≫ と miqan ≪ 肉 ≫ に対応するハルハ方言の mängge と maxxe（正書法ではそれぞれ mängga と max）の対がある。

ラムスデッドから受け継がれ、以来今日に至るまでくり返されてきたこの事実を、われわれは「*iの折れ」の単なるヴァリアントとして見過ごすわけにはいかない。それらは、*i音の史的発展における二つの異なったタイプの変化として峻別さられてはならない。つまり、mingran＞mängge の変化では *i が語頭子音と口蓋化した母音 *a との間にあたり音と化して *i のなどりをとどめているのに対し、miqan＞maxxe の変化では *i が後続の音節の *a に完全に同化して、*i の痕跡は全く認められない。われわれは野村正良氏に従って、前者のタイプの「折れ」を「不完全な折れ」と呼び、後者のタイプを「完全な折れ」と呼ぶことにしたい。

* i 音の発展の図式を検討するうえで、両者のタイプの「折れ」を厳密に区別しておくことの意義は、強調しきることはないように思われる。

ハルハ方言で、「不完全な折れ」はもっぱら語頭子音が *b，*m，*n，*g，*k であるときに観察される。すなわち、第 2 音節の *a の前で,
*bi- → bia-, *mi- → mia-, *ni- → nia-, *gi- → gia-, *ki- → xia- となる。（正書法ではそれぞれ 白-, 黒-, 赤-, 緑-, 紫-）これらと同じ条件のもとに「完全な折れ」が生じているのは、*miqan → maxxe（とその派生語）の場合に限られているようにみえる。

「不完全な折れ」の例:

<table>
<thead>
<tr>
<th>蒙古文語</th>
<th>ハルハ方言</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>bira</td>
<td>白</td>
</tr>
<tr>
<td>mindasun</td>
<td>紙</td>
</tr>
<tr>
<td>gilgar</td>
<td>焼い棒</td>
</tr>
<tr>
<td>kilbar</td>
<td>紫</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| nilqa   | 豊

語尾子音が*j*, *č*, *s* のとき、また*i*が語頭にあるときには、上の場合と様相を異にする。第2音節に*a*をもつ場合を例にとって考えてみよう。ハルハ方言では、*ji*と*či*が*a*の前で「折れ」する場合に、語頭の子音が口蓋音としてあらわれるもの（*ji- → dža-, *či- → tša- ; 正書法ではそれぞれ じゃ-, か-) と、 非口蓋化子音としてあらわれるもの（*ji- → dža, *či- → tša- ; 正書法ではそれぞれ ざ-, ざ-) の2種類の変化が認められる。この場合、口蓋音（dž, tš）を*i*の痕跡とみなして「不完全な折れ」に数え、子音が口蓋化していないものは*i*の痕跡が認められないので「完全な折れ」とみなすことができる。例：

<table>
<thead>
<tr>
<th>蒙古文語</th>
<th>ハルハ方言</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ḫiir加大</td>
<td>白</td>
</tr>
<tr>
<td>ḫiirasun</td>
<td>魚</td>
</tr>
<tr>
<td>cf. ǰaqa</td>
<td>赤</td>
</tr>
<tr>
<td>činar</td>
<td>柿</td>
</tr>
<tr>
<td>ʾčiraj</td>
<td>柿</td>
</tr>
<tr>
<td>cf. čar</td>
<td>紅</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*ji-, *či- の連絡の場合にも、さきに見た子音の場合と同様、第2音節の*a*の前で「完全な折れ」が起こった語は、やはりりわけて少数である。筆者の予備的な調査では、上の2例（とその派生語）に加えて zaratna- かゆい （蒙古文語形 ḫiiratuna- ～ ḫaratuna- ）が見いだせるにすぎない。
*i が語頭に位置する場合、ヘルハ方言では第 2 音節の* a の前で規則的に ja-（正書法では ṭa-）となり、例外は見いだせない。ところが、ウラディミルツォフはヘルハ方言で語頭の *j のあとに *a と *ɑ の異なった母音を認めている。（かつて内は蒙古文語形）

jahăk    （inar ）〈いとしい人〉
jâγuâšây  （ibčaru）〈狭い〉
jâmâ  （imâran）〈山羊〉
jâpârâe  （irâjî）〈すいかずら〉
cf. jaw-  （jabu-）〈行く〉

口蓋音母音をもつ最初の 2 例を「不完全な折れ」とみなし、他の 2 例を「完全な折れ」とみなすことができよう。ただしウラディミルツォフは上の区別を一貫して用いているわけでなく、語数も多くない。より徹底した調査が必要とされる。

*j が語頭子音の*s のあとに位置するとき、ヘルハ方言では、第 2 音節の* a の前で規則的に sa-（正書法では ṭa-）となっており、「折れ」が「完全」か「不完全」か区別できない。ただしウラディミルツォフがここでも a と *ɑ の 2 種類の母音を区別していることに注意を払っておこう。

wâγârâp  （sidar）〈親しい〉
wâhârâe  （siγai）〈足首の小骨〉
cf. warp  （šar）〈去勢牛〉

用例がきわめて限られており、また表記法にも若千のゆれがみられるのは残念である。

以上、「完全な折れ」と「不完全な折れ」の見地にたって、ヘルハ方言において、*i が *a の前で「折れ」る場合をみるととき。語頭における*i と *si との場合には若千の問題を残しながらも、変化の大勢は明らかであろう。要約すると、ヘルハ方言では「完全な折れ」と「不完全な折れ」の区別は、*jì、*ciの連結の場合には、語頭子音の違いとして、それ以外の場合には母音の違いとして区別される。そして *a の前に位置する*i が「完全に折れ」で *a となるのは、きわめて少数の限られた変化であることから「不完全な折れ」を規則的な変化とみなすことに無理はないと思われる。
② 図式における「不完全な折れ」の位置

この段落のはじめに指摘したように、ハルハ方音の「*iの折れ」の図式が例外の多い不完全なものであるのは、一部には*i音の発展に関してハルハ方音が特殊な変化をとげたことにもよっている。その特殊性の大きな部分を占めるのが「不完全な折れ」である。

(1) *a の前の*i

*a および二次的な* a の前における*i音の発展について、ボッペは次のような図式を示した。

「モングボール語、オルドス語、カルムイク語で、母音*i は先行の子音を口蓋化することなく a になっている。それはハルハ語で a あるいは* a となり、ダグール語、ブリヤート語では先行の子音の口蓋化を伴って* a となっている。母音*i は中世蒙古語、モンゴル語で i として残っている。」(10)

これがきわめて不完全な図式であることは、図式に付随して述べられて次のことばからもわかる。

「おびただしい例外があり、* i はある言語で a となることがあるのに、別の言語では*i が通例 a となる同様な条件のもとにあるながら i として残っている。」(10)

われわれは①でハルハ方音における「完全な折れ」と「不完全な折れ」の区別をみた。この中で、ハルハ方音の「不完全な折れ」を図式の中に適切に位置づけることによって「おびただしい例外」の数は半減する。

ハルハ方音において*a の前の*i の規則的な発展は「不完全な折れ」であるとはすでに見た通りであるが、ハルハ方音の「不完全な折れ」に対応して、オルドス方音とカルムイク方音では規則的に i が保存されている。

例：(10)

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>nilqa</td>
<td>nilxa</td>
<td>nilxe</td>
<td>nilxe₂</td>
<td>nîlxe</td>
</tr>
<tr>
<td>miγran</td>
<td>miγga</td>
<td>miγgn</td>
<td>miγga₂</td>
<td>miγaγa</td>
</tr>
<tr>
<td>bida</td>
<td>bida</td>
<td>bidn</td>
<td>bêd’i</td>
<td>bîddə</td>
</tr>
<tr>
<td>ŝiran</td>
<td>džira</td>
<td>džirn</td>
<td>žaraγ</td>
<td>džaraγ</td>
</tr>
</tbody>
</table>
さらに、「*aの前の* i」について、語頭の位置におけるボッベの図式は次の通りである。

「語頭の*i* は、ダグール語、オルドス語、ハルハ語、ブリヤート語およびカルムイク語で*ja* となるが、蒙古文語、中世蒙古語、モンゴル語およびモゴール語で* i* として残っている。」

この例として、ポッベは蒙古文語の imar an <<山羊>>, inar <<いいらしい人>>, irkai <<Cornelian cherry>>, ilara <<果実, えびの果実>> をあげている。しかし、ハルハ方言でみたように、imar an > yaama, irkai > yragaan の変化は「完全な折れ」としての疑いがある。そこで、これらを除いて、残りの例をみると規則性が明らかになる。すなわち、オルドス語、カルムイク語に加えてブリヤート語においてもハルハ方言の「不完全な折れ」に対応するのは、* i* の保存である。

例：

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>inar</td>
<td>inak</td>
<td>in!g</td>
<td>inar</td>
<td>janak</td>
</tr>
<tr>
<td>ilara</td>
<td>ilî</td>
<td>ilêşn</td>
<td>ilaa[h]a(n)</td>
<td>jala</td>
</tr>
</tbody>
</table>

〜 ilêşn

さらに若干の例を加えておく。

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ilra-</td>
<td>ilg-</td>
<td>ilga-</td>
<td>ylga- 〜区別する</td>
</tr>
<tr>
<td>imarta</td>
<td>imaGta</td>
<td>imañta</td>
<td>yamant 〜常に</td>
</tr>
<tr>
<td>idqa-</td>
<td>idxa-</td>
<td>idxha-</td>
<td>yta- 〜諫める</td>
</tr>
</tbody>
</table>

こうして、ハルハ方言の「不完全な折れ」に対応して、オルドス、カルムイク、ブリヤート等の諸方言において* i* 音の規則的な保存を認めることができる。ハルハ方言に特徴的な「不完全な折れ」(*i > i* ) の場合、さきにみたボッベの図式は成立立たないのである。

それでは「完全な折れ」の場合はどうか？「完全な折れ」の場合には、すでに示されているボッベの図式がそのままあてはまる。結局、ボッベの図式は、量的にはむしろ少数の「完全な折れ」の図式であって、

—41—
これとは異なった図式が成りたつ「不完全な折れ」をも同時に同じ図式で説明しようとしたところに無理があったのである。異なった原理に属する現象を一つの原理で割り切ろうとすれば例外は避けられない。しかも、例外的な少数の原理をもって規則的な多数を律しようとすれば、その例外は「おびただしい」ものとなって当然といえる。

(2) *u の前の*i

ポッペの図式によれば、通則として、
「*u の前の母音*i は規則的に u に発展している。」(26)

ハルハ方言もこの例に適用されない。言うまでもなく、この変化は「完全な折れ」に数えられる。*a の前の*i は、「完全に折れる」例は少数で、「不完全に折れる」方が規則的であったが、*u の前の*i はこれに対して、「完全な折れ」がふんだんだに見出せる。

例：

蒙古文語 | ハルハ方言
---|---
nisun | нус | 《鼻汁》
*jiru- | зур- | 《描く》
*cisun | цус | 《血》
niqu- | нух- | 《こねる》

しかし、*u の前の*i の「折れ」が「完全な折れ」だけに限られているわけではない。この点でポッペの図式はやはり片手落ちといえる。

*u の前の「不完全な折れ」の例：

蒙古文語 | ハルハ方言
---|---
nicu- | няц- | 《退く》
kidu- | хяд- | 《殺戮する》
kimural | хялмал | 《混乱》
*jirum | жұрам | 《法規》
ciqul | чухал | 《重要な》

「不完全な折れ」の場合、*i が折れてあらわれる母音に注意せねばならない。上の例で明らかのように、*jī-、*či- の連続では口蓋化子音のあとに u があらわれるが、それ以外（もっぱら*nī-、*kī-）では *i があらわれる。

以上述べてきたことをまとめると次のような表としてあらわすことが
できる。

(o) *a と*uの前における「*iの折れ」 (ハルハ方音)

<table>
<thead>
<tr>
<th>語頭子音</th>
<th>「折れ」の種類</th>
<th>*a の前</th>
<th>*u の前</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>不完全な折れ</td>
<td>完全な折れ</td>
<td>不完全な折れ</td>
</tr>
<tr>
<td>*b, *m, *g</td>
<td>i</td>
<td>a</td>
<td>i</td>
</tr>
<tr>
<td>*k, *n</td>
<td>dž</td>
<td>dž</td>
<td>dž</td>
</tr>
<tr>
<td>*γ</td>
<td>tš</td>
<td>tš</td>
<td>tš</td>
</tr>
<tr>
<td>*ε</td>
<td>ſa (?), ša</td>
<td>šu</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>語頭</td>
<td>jā (?), ja</td>
<td>?</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

稀

(3) *aru の前の* i と*uru, *iru の前の* i

*aru の前の* i について，ポッペはオイラート文語とカルムイク語の特殊な変化を挙げたあと，

「残りのモンゴル諸言語において，母音* i は，この位置で，* u あるいは 
は u < *uru の前におけると同様の発展をとげた。」

と述べている。さきに見た通り，ポッペは* u の前の* i について「規則的に
に u に発展する」としていた（前ページ参照）。ところが，*aru の前
の* u が i に変化する例がある。

例：

<table>
<thead>
<tr>
<th>蒙古文語</th>
<th>ハルハ方言</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>kiraru</td>
<td>хяруу</td>
</tr>
<tr>
<td>biraru</td>
<td>бяруу</td>
</tr>
<tr>
<td>bidaru</td>
<td>бядуу</td>
</tr>
</tbody>
</table>

上例では，*aru の前の* i は，*a の前の「不完全な折れ」に準じている

---43--
ようにみえる。しかし次の例から*aru の前の* i はむしろ* u の前の「不完全な折れ」と同じタイプであることがわかる。

蒙古文語  ハルハ方言
cilaرعん  чулуу  ≪石≫
cf. siبارعん  шувуу  ≪鳥≫

他方*uru,* i luzu の前の* i は,* u の前の「完全な折れ」の変化に準じている。

蒙古文語  ハルハ方言
niruرعん  нуруу  ≪背≫
bisirуん  бушуу  ≪速 く≫
ただし niluرعん  нялуу  ≪いながら≫

③ * i が常に保存される条件の例外

ポッペの図式によれば、母音* i は、

(a) 単音節語幹、および
(b) 第 2 音節に* i か* e を含む多音節語幹で、規則的に i として残る。ハルハ方言では、上の条件にあって i が保存されている場合と、上の条件内にあって* i が折れていると思われる語が若干認められる。

(1) *u の前の* i
「*u の前の母音* i は* u あるいはさらに w となる。ダグール語では* i は i として残っている。」

例： 蒙古文語  ハルハ方言
nidүн  нүд  ≪目≫
sidүн  шүд  ≪歯≫
nицүгүн  нуцгэн  ≪裸の≫
ʒiʃүн  зүс  ≪容ぼう≫
nиɡүл  нүгɛл  ≪罪≫

ところが、*u の前の* i が規則的に u となり、若干の語で ˀ i u となったように,* i での前の* i は規則的に w (= y) となり、若干の語では i (= u) として残っているのである。

例： 蒙古文語  ハルハ方言
ʒиrmүʃүн  жиремээн  ≪妊娠した≫

—44—
*a と*u*の前におけるハルハ方言の「*i* の折れ」と論じた際に、*i*の痕跡が認められるか否かによって、*i*音の発展に二つのタイプを区別したが、*ü*の前においてもこの区別が有効となるのではないだろうか。*i* > *u* となる規則的な変化を「完全な折れ」とみなし、他方、上の例にみるような i 音の保存を「不完全な折れ」と同列に置くことによって、ハルハ方言の *i* を発展に全体をより一貫したものとして把握することができる。

(2) *égü* の前の *i* と *ugü*, *igü* の前の *i*

*égü* の前の *i* についてポッペの述べるところは、「*ü*となり、あるいはさらに *u* に発展している」（90）とある。つまり *ü* の前における変化の説明と全く同じである。さらに *ugü* および *igü* の前の *i* についても同じ説明がなされている（91）。ここで、*ü* の前の *i* の発展の二つのタイプのうち、i を保存している方をもあえて「不完全な折れ」と呼ぶと、*égü* の前の *i* には「不完全な折れ」が生じていることがわかる。

例:

蒙古文語　ハルハ方言

*bilegü*　**bilyy**　＜砥石＞
*ilegü*　**ilyy**　＜まっった＞
*bitegüü*　**bityy**　＜閉じた＞
*jikegün*　**jixyyh**　＜冷たい＞

一方、*ugü* の前の「完全な折れ」の例には、

蒙古文語　ハルハ方言

*nidügüür*　**nydyyr**　＜すりこぎ＞

をあげることができる。

(3) *e* の前の *i*

ポッペの断式では、*e* の前の *i* は規則的に *i* として保存されることになっているが、この条件のもとに *i* が「折れ」であると思われる語が若干ある。それらは、蒙古文語形に、第 1 音節に *i* をもたない形も見られるのでより確かな証拠を必要とするが、一応資料としてあげておく。

例:

蒙古文語形　ハルハ方言

*jibec ~ jibei ~ jebi* 398　＜鉄＞

—45—
４．

ハルハ方言における *i 音の発展を考察する際に、*i 音の痕跡が認められるか否かという観点に立って、まず *a と *u の前の位置において「不完全な折れ」と「完全な折れ」を区別することから出発した。さらに *e と *i の前の位置においても「i の保存」と「折れ」という区別が上の観点にあってはまることを論じた。問題はすでに「折れ」の領域を越えて *i 音の発展の図式全体に及んでいる。

「*i の折れ」は *i 音の史的発展のうちから「i が保存されている」場合を除外した概念である。1903 年にラムステッドが蒙古言語学に Brechung （折れ、割れ）という用語をもってこの現象をとりあげたとき、彼がいわゆる「不完全な折れ」を主眼にしていたことは疑いない。というのは、Brechung は「隣接する子音の影響のもとに単母音が二重音化すること」をあらわす印欧比較言語学のタームを借りてきたものだったからである。「*i の折れ」はちょうど 1 枚の皿が 2 枚に「割れ」るように、また 1 本の棒が 2 本に「折れ」るように、母音の *i が i という 2 つの母音になることを意味していた。さきに見たラムステッドの「*i の折れ」の図式が、今から見ると不必要に「わかり音化」を強調しているのもうなずける。この見方はウラディーミルツェフにもそのまま受け継がれているが、ポッペに至って、単なる「同化」の同義語として用いられるようになった。しかし、力点の置きどころは違っても、ラムステッド以来一貫しているのは、*i の発展の中で、i として保存されるものとは切り離して「*i の折れ」を捉えていることである。

しかし、すでに見てきたように、「折れ」のうちの多くの部分を占める「不完全な折れ」は、「完全な折れ」とは異質の、むしろ「i の保存」とパラレル
な関係に立っているのである。次の表を参照されたい。

| *a, *u の前 | *i の証跡の保存 ↔ *i の完全な消失 |
| *e, *ü の前 | 不完全な折れ ↔ 完全な折れ |
| i の保存 ↔ 折れ |

われわれは、「不完全な折れ」と「i の保存」とをまとめて、それ以外のすべての「折れ」と対立させねばならない。仮に前者を第 I 類の発展、後者を第 II 類とよぶと、第 I 類の図式は次のようになる。

(1) *a の前の *i → i ֧
(2) *u, a ū " *i
(3) *e " *i
(4) *ü, egü " *i

(*ji-, *či-, *si- の連絡は、*a と*u の前でそれぞれ dža-, tša-, ša; džu-, tšu-, šu- となる — 後者は稀。また語頭の *i は *a の前で ja; *e, *ü の前で i となる。)

また第 II 類の図式は次のとおり

(1) *a の前の *i ＞ a
(2) *u, ū, ē ū " *i ＞ u
(3) *e " *i ＞ e
(4) *u, ū, ē ū " *i ＞ ū

(*ji-, *či- の連絡は *a, *u の前でそれぞれ dža-, tša-, dzu-, tsu- となる）

註

(1) 「蒙古語」はモンゴル系の言語一般をさす。この用法は小沢重男教授の提唱に従った。「蒙古文語」についても同様。cf. 小沢重男「蒙古語の歴史と系統」、服部四郎編『言語の系統と歴史』東京、1971、247 - 248 頁。
(3) 服部四郎「蒙古語の口語と文語」,『蒙古学報』第 2 号, 1941,
174 - 180頁。
(4) 服部四郎「蒙古語文語の起源について」、『言語研究』第3号、1939、1 - 27頁。
(6) Poppe, Introduction, p. 16.
(7) Ibid., p. 37.
(8) 註の(2)を参照。
(9) 以下Poppe, Introduction, pp. 33-44による。なお、第1音節に*iがある場合でも,*i*,*ige,*i*u,*iguおよび*igiの連続は「長母音」のセクション（同書pp. 59-76）で扱われていて、ここには含まれていない。
(10) プリヤート方言に関するこの説明は再検討を要する。現代プリヤート文語の正書法では、女性語の語頭ではiを書かずにeのみを書き、語中では硬子音のあとにeを、軟子音のあとにiを書く。つまり正書法では女性語において母音のiとeを書き分けていない。cf. М. Н. Имехенов, Ц-ж. Ц. Цыдыпов, Бурят хэлэнэй грамматика, Нэгэдэх хуби, фонетикэ, морфология, Улаан-Улэ, 1968, стр. 22.
(12) Ramstedt, а. а. О., S. 46.
(14) 註の(9)を参照。*i*aの連続では,*ni*a-《貼る》が「完全な折れ」を起こしている：ハルハ方言 nā-。

---48---
Владимирцов, Указ, соч., стр. 426.
Там же стр. 432.
loc. cit.
loc. cit. 例はポッペのあげているものをそのまま利用する。略語：Mo. ＝蒙古文語, Urd.＝オルドス語, Kalm.＝カルムイク語, Bur.＝ブリヤート語, Kh.＝ハルヘ語。また $\ddot{a} = \ddot{y}$
現代ブリヤート文語では мянга(н) cf. Черемисов, Там же, стр. 314.
G. J. Ramstedt, Kalmückisches Wörterbuch, Helsinki, 1976 (rpt.) によれば "tśidexə können(selten), = tśadeξə" ともある。
(S. 438a)
Ibid., p. 40.
Черемисов, Указ, соч., стр. 278.
Там же, p. 277.
Ibid., p. 41.
loc. cit.
Ibid., p. 42.
loc. cit.
Ramstedt, а. а. О., S. 45.
E. Sievers, Grundzüge der Phonetik zur Einführung in das Studium der Lautlehre der indogermanischen Sprachen, 5. verbesserte Aufl., Leipzig, 1901, S. 293.